

中宮のはらからなればにや、日陰とおぼしくて、鏡のうへにあしでにてかきはべりける。

藤原能長○歌

〔藩翰譜山上〕むかし一豊織田家に出て仕へし初め、東國第一の名馬なりとて、安土に引來りてあ
きなふもの有り○中其頃一豊は猪右衛門尉と申せしが、此馬ほしくおもへども、求る事いかに
もかなふべからず、家にかへりて世の中に身まづしき程口をしき事はなし、一豊つかへのはじ
めなり、かゝる馬に乗りて見參に入たらむには、屋形の御感にもあづかるべきものをと、ひとり
ごとひしに、妻はつくくときいて、其馬の價いかばかりにやとふ、黄金十兩とこそいひつ
れとこたふ、妻さほどにおもひ給はんには、其馬もとめたまへ、あたひをばみづからまゐらすべ
しとて、鏡の宮の底より黄金十兩とり出しまゐらす○下

鏡臺

〔倭名類聚抄十四〕鏡臺 魏武疏云、純銀參帶鏡臺辨色立成云

〔類聚名義抄八〕鏡臺カ、ミカケ

〔伊呂波字類抄雜物〕鏡臺キヤウタイ

〔易林本節用集器財〕鏡臺キヤウタイ

〔大安寺伽藍縁起并流記資財帳〕合雜物貳拾捌種

鏡臺肆足

〔源氏物語末摘花〕けうそくををしよせて、うちかけて、御びんぐきのまどけなきをつくるひ給、わ
りなうふるめきたるきやうだい、からくしげ、かかげのはこなどとりいでたり、さすがにおとこ
の御具さへ、ほのくあるを、ざれておかしとみたまふ○中繪などかきて、色どり給、よろづにお
かしうすさびちらし給けり、我もかきそへたまふ、髪いとながき女をかきたまひて、はなにべに
をつけてみたまふに、かたにかきてもみまうきさましたる、わが御かげのきやうだいにうつれ